

〈論文〉

## H. Г. チェルヌイシェフスキーと「リベラル」との位相関係

大 矢 温

### はじめに

1991年末のソヴィエト連邦の崩壊は、思想史研究の分野でも大きな画期となった。80年代後半の「ペレストロイカ」期にはじまった「歴史の見直し」が一層急速に進み、また、「西側」の研究者との交流も以前とは比較にならないほど活発になった。本論で分析の対象とするH. Г. チェルヌイシェフスキーについてもソヴィエト史学に見られたイデオロギー的歪曲を廃して実証的な研究がすすめられた<sup>1</sup>。しかしながら、すでに別稿でも指摘したように<sup>2</sup>、ソ連崩壊から四半世紀以上を経過した現在に至っても、従来の「革命的民主主義者」としてのチェルヌイシェフスキー像に代わる新たなチェルヌイシェフスキー像が確立したとはいいがたい。

本論においては、従来の「革命家」としてのチェルヌイシェフスキー像に抜本的な修正を加える準備作業として、「革命家」と「リベラル」との関係に着目して、農奴解放議論から逮捕に至る彼の思想の分析を進める。時系列順にまず、1858年から59年に「解放論者の統一戦線の形成」を放棄した、とされるチェルヌイシェフスキーによる「一連の自由主義批判論文」<sup>3</sup>として、『現代人』誌上の論文「カヴェニャック」、および「ルイ18世とシャルル10世統治下のフランスにおける諸党派の戦い」を検討する。次に、農奴改革議論が展開する中で「上からの改革」に見切りをつけた彼が「改革から革命へ」と路線を転換し

1 サラトフのデムチェンコ氏は、このチェルヌイシェフスキーを巡る研究状況の画期について「ロシアにおけるチェルヌイシェフスキー研究の中心と認められているサラトフへの日本人研究者の来訪は、この作家・思想家に対する従来の見解への本質的な再検討の時期と一致する」と指摘している。Демченко А. А. Николай Чернышевский: взгляд из XXI века // 日本ロシア史研究学会、『ロシア思想史研究』, 2011年第2号, 3頁。日本人研究者のサラトフとの交流は1998年の故今井義夫氏を嚆矢とするので、世紀を挟んだこの時期にチェルヌイシェフスキー研究の再検討が本格化したと考えられる。ちなみにサラトフ市は1992年まで閉鎖都市であったため、外国人研究者との交流は事実上不可能だった。

2 拙稿「H. Г. チェルヌイシェフスキーの『革命的民主主義』再考」, 札幌大学外国語学部『文化と言語』, 2015年第82号, 187頁参照。

3 石川郁男『ゲルツェンとチェルヌイシェフスキー』, 未来社, 1988年, 64頁。

た<sup>4</sup>、とされる契機となった論文「共同体的所有に対する哲学的偏見の批判」を検討し、さらに59年以降の彼の「上からの改革」に対する評価の分析を精緻化するために、ロシアの農奴解放事業と同時進行的に展開したアメリカの奴隷解放事業におけるリンカーン大統領に関する彼の評価を分析する。その上で、59年から62年に『現代人』誌の「政治」欄に発表された政治評論から、イギリスのリベラルに関する彼の評論を取り上げて分析する。

そしてその上で、従来「革命家」と二項対立的に描かれてきた「リベラル」とチェルヌイシェフスキーとの関係を吟味する。その際、「革命家」と「リベラル」との思想的立ち位置を単次的に直線状に配置して二項対立的に比較するのではなく、それぞれの思想を取り巻く歴史的、地理的要素などを加味して複次的に立ち位置の違い、思想的位相関係を解明するつもりである。

## I 「カヴェニャック」

1858年の1月号と3月号の『現代人』に発表された「カヴェニャック」は<sup>5</sup>、第二共和政時代のフランスの政治史を評論したものである。従来、この論文は「フランスのリベラルたちの背信的政策を暴露」し、「パリの勤労者を裏切った『社会主義者』 - 改良主義者の腐りきった本質を容赦なく暴露した」、ブルジョアの反動に対する「怒りと憎悪に満ちた」著作<sup>6</sup>、とされ、「革命的民主主義のリベラル・イデオロギーに対する闘争の先鋭化」の先駆けとなった論文<sup>7</sup>、と位置付けられてきた。この論文の意図についても、ロシア国内の読者に対して、フランスの労働者が穏健共和派のカヴェニャックや平和的手段によって労働者の要望を実現しようとしたルイ・ブランなどの「社会主義者」と連合した結果、結局、1848年の六月事件で弾圧され、敗北を喫した、というフランスの政治史を解説することによって、そのアナロジーとして、ロシアのリベラルの改良主義によっては農民の状況は改善せず、農民問題の唯一の解決策が農奴制の革命的廃止であることを宣伝することを目的としている、と解釈されてきた。

ただし、この論文によってチェルヌイシェフスキーがロシア国内のリベラルと袂を分かち、「独自の急進運動」を作り出そうとしたのか、革命路線に転じたのか、という点については状況的に問題が残る。「カヴェニャック」が発表された3月号の翌月、4月号の『現

4 同上、72頁。

5 Чернышевский Н. Г. Кавеньяк // Современник. 1858. Т. 67. Кн. 1. С. 1-37; 1858. Т. 68. Кн. 1. С. 303-332

6 Примечания // Н. Г. Чернышевский. Полное собрание сочинений. М., 1950. Т. 5. С. 919.

7 Сладкевич Н. Г. Очерки истории общественной мысли России в конце 50-х – начале 60-х годов XIX века. Л., 1962. С. 46.

代人』にチェルヌイシェフスキーは「農村生活の新しい条件」の第二論文としてК. Д. カヴェーリンの土地付き解放を骨子とする農奴制改革案、「覚書」からの抜粋を掲載しているからである<sup>8</sup>。しかもこの記事にチェルヌイシェフスキーは「我々はこの覚書を、我々と同様にこの作者の基本的信念に共感する人々を統一するための公式として掲載する」と書いている<sup>9</sup>。ロシア・リベラル陣営の代表的な思想家であるカヴェーリンの農奴改革案をたたき台にして統一的な改革案を審議しよう<sup>10</sup>、と呼びかけているのである。1858年4月の時点でチェルヌイシェフスキーはリベラルと断絶、というよりは共同して農奴改革案を審議しようとしていたと解釈すべきであろう。

実際、スターリンの大粛清以前のソ連にもこのような解釈があった。たとえばエヴゲニエフ・マクシモフは、チェルヌイシェフスキーの「カヴェニャック」の真意を「もしアレクサンドル2世が自分と自分の人民の善を望むのなら、彼は大衆の支持に支えられながら広範な民主的改革の道を進まねばならない。もし彼にその決定をする力がないのなら、彼にリベラルとの同盟の方が農奴主との同盟よりも彼と王朝にとってより危険でないことを理解させなければならない」ということにある、と解説している<sup>11</sup>。この時点でのチェルヌイシェフスキーはアレクサンドル2世による「上からの改革」、リベラルとの共同、という方策も選択肢に入れていた、との解釈である。

内容の検討に移ろう。この評論は、前年1857年10月にカヴェニャックが死亡したのを機に彼の政治活動を回顧する、という体裁をとっているが、実際はカヴェニャックを取り巻くフランス第二共和制下の政治的ダイナミズムの解説である。「それぞれの政党が多く、の誤りをしでかし、その結果、事件が致命的な展開をむかえた」過程の解説である<sup>12</sup>。

周知のごとく1848年の二月革命の結果、フランスは共和制に移行した。そこで主導権をとったのは「カヴェニャックの党」、「穏健かつ純粋な共和派」の党であった。ところがチェルヌイシェフスキーはカヴェニャックが「国家人」としての資質に欠けるとみなす。「国

8 *Чернышевский. О новых условиях сельского бита (статья вторая) // Современник. 1858. Т. 68. Кн. 2. С. 493-539.*

9 *Там же. С. 539.*

10 カヴェーリンは1856年にБ. Н. Чичеринとともにロシア・リベラリズムの綱領的文書をゲルツェンの自由ロシア印刷所から発表している。*Кавелин К.Д., Чичерин Б.Н. Письмо к издателю // Голоса из России. Лондон, 1856. Т. 1. С. 9-31.*

11 *Евгеньев-Максимов В. «Современник» при Чернышевском и Добролюбовев. Л., 1936. С. 246.* 日本でも石川氏はこの論文について、「彼が58年段階にはまだ自由主義者との最終的な決裂を志向せず、自由主義者に対する『忠告』を意図していたと解釈できる余地を残している」としている。石川郁男, 前掲書, 66頁。

12 *Чернышевский. Кавеньяк // Чернышевский. Т. 5. С. 5.*

家人」としての資質とは「社会で活動している各要素の勢力と志向を理解すること」、「自らの目的を達成するために、それらの各要素のどれと連合することができるか理解すること」である<sup>13</sup>。ところがカヴェニャックの党は二月革命で主導権をとりながらも、労働者に対する対応を間違えたために「フランスにとって高くついた」誤りをしでかしたのであった<sup>14</sup>。

「フランスにとって高くついた」誤りとは、一義的には1848年の六月事件のことである。1848年6月のこの事件において、パリの労働者は武装蜂起して、その結果、武力によって鎮圧されたが、直接の契機となったのは、国営作業場の閉鎖であった<sup>15</sup>。この国営作業場は、二月革命において、労働者の支持なしでは無力な穏健共和派が国家による失業対策という労働者の要望を受け入れる形で開設したのだった<sup>16</sup>。しかし政府の無策からここで労働力を有効に活用することができず、財政に大きな負担を強いたために閉鎖されたのであった。「政府の誤りは不可避的な内戦へと導いた」<sup>17</sup>。このようにチエルヌイシェフスキーの理解では、六月事件の悲劇は無能なカヴェニャックと穏健共和派政府が労働者の要望を無視するという誤りを犯したことが原因であった。「国家人としてカヴェニャックは、一貫性も才能も欠いていた」、「彼の誤りによって事は六月の内戦へと導かれた」<sup>18</sup>。穏健共和派政府は、労働者が政体の変革ではなく、「彼らの社会状況を改善する改革」を要求している、ということを理解せず、改善策も講じなかったのだ<sup>19</sup>。

他方、労働者の側も合理的判断を誤った、とチエルヌイシェフスキーは指摘する。労働者は穏健共和派の政府によって自らの希望が実現すると考えた。ところが、穏健共和派の目的は労働者の救済ではなく、政体の変革であった。また、六月事件では、十分な準備も確固たる綱領も指導者もなく武装蜂起に走ったことも彼らの誤りであった。「自暴自棄—これが六月の日の唯一の説明だ」<sup>20</sup>。パリの労働者は理性的な判断を失って武装蜂起に走ったのであった。その結果、六月事件では下層民を中心に数多くの犠牲者を出し<sup>21</sup>、また一方で、国民公会による全権委任という形でカヴェニャックの独裁に道を開いたのであ

13 Там же . С . 7.

14 Там же .

15 Там же . С . 14.

16 Там же . С . 15.

17 Там же . С . 26.

18 Там же . С . 32.

19 Там же . С . 36.

20 Там же . С . 26.

21 Там же .

た<sup>22</sup>。「パリの労働者は穏健共和主義者と連合したために、長期間一片のパンなしで放置され何千人もが戦場で死に、何千人もが投獄される、という代償を払った」<sup>23</sup>。

チェルヌイシェフスキーの分析によれば、二月革命後のフランスにおいて、穏健共和派単独では共和制の維持は不可能であり、労働者の支持が不可欠であった。それを理解せずに労働者と敵対したことに穏健共和派の誤りがあった。「穏健共和派はフランスに共和政体を設立しようとした」が、「国民のどのような階級がこの政体の唯一の擁護者となるだろうか」、「ただ、労働者階級のみである」。「穏健共和派は、彼らとの戦いをやめる努力をするべきだった」<sup>24</sup>。チェルヌイシェフスキーの見立てでは、当時のフランスで地主や教会勢力を中心とした反動勢力に対抗する勢力は本来なら労働者階級であった。そしてその両者の中間に位置するのが社会的には少数派の共和派である。ところが労働者の多くは自らの利益を理解せず、合理的な判断ができなかった。彼らは伝統的な権威にすがることによって反動勢力に取り込まれてしまったのだ。これに対して自らの利益を理解して反動勢力と対立できるのは少数の都市労働者だけである。したがって、反動勢力と対決するためには労働者と共和派との同盟が不可欠なのであった<sup>25</sup>。穏健共和派が労働者階級に対する闘争を続ければ、労働者階級は「孤立無援となり、没落するであろう。そしてそれとともに穏健共和派自身も死に絶えるのだ」。「このような戦いの継続は彼らにとって致命的だった」<sup>26</sup>。実際、穏健共和派と労働者の同盟の破たんは、1848年9月の憲法制定会議における王党派の復活、および大統領選挙におけるルイ・ナポレオンの圧勝、つまりはカヴェニャック自身の没落へと道を開いたのである。

二月革命から第二共和制に至るフランスの政治のダイナミズムを解説しながら、チェルヌイシェフスキーはここから1つの教訓を導き出す。それは、「何をするにしても、思慮分別を持って行動すれば自分の行動の結果を期待できる」というものである<sup>27</sup>。カヴェニャックら穏健共和派に対する批判を農奴制改革議論がすすむロシアの現実とのアナロジーで見ると、主要な批判対象はロシア・リベラルということになる。たしかにチェルヌイシェフスキーのカヴェニャック批判は、そのままロシア・リベラルに向けられた批判でもあった。しかし、上述のように、この論文は共和派と労働者、双方が合理的判断を欠

22 Там же .

23 Там же . С . 33.

24 Там же .

25 Там же . С . 39.

26 Там же .

27 Там же . С . 52

いて行動したことを批判したものである。決して共和派だけが批判の対象ではない。とすれば、この論文をもってチェルヌイシェフスキーが「上からの改革」に絶望し、ロシア・リベラルと袂を分かった、と断言することができるだろうか<sup>28</sup>。「カヴェニャック」と並んで「チェルヌイシェフスキーの代表的な自由主義批判の論文」<sup>29</sup>とされる「ルイ 18 世およびシャルル 10 世治世下のフランスにおける諸党派の争い」を素材にさらに検討を進めよう。

## II 「ルイ 18 世およびシャルル 10 世治世下のフランスにおける諸党派の争い」

雑誌『現代人』誌の 1858 年 8 月号及び 9 月号に掲載された「ルイ 18 世およびシャルル 10 世治世下のフランスにおける諸党派の争い」は<sup>30</sup>、1858 年から刊行の始まった F. ギゾーの『回想』の書評という形で七月革命にいたる復古王政期のフランスの政治のダイナミクスを解説したものである。「カヴェニャック」と同様に、この論文も従来は「チェルヌイシェフスキーがブルジョア・リベラリズムの反人民的本質と『全くの空虚さ』を暴露し」、「1830 年七月革命におけるフランスのリベラルたちの背信的役割を明らかにし、ブルジョア議会主義を厳しく深く批判した」ものとされてきた<sup>31</sup>。果たしてこの論文が、ロシアの改革論においてリベラルと袂を分かつというチェルヌイシェフスキーの政治路線の転換を反映したもののなのか、分析を進めよう。

チェルヌイシェフスキーが書評したのは、フランスのリベラル派の元大臣ギゾーが著した『回想』の第 1 巻である。ギゾーは、ティエールらとともにブルボン王朝を崩壊に導きルイ・フィリップを新国王に擁立した七月革命の立役者である。48 年の二月革命までフランスの政治の中心にいた人物の『回想』である。興味がわかないはずがない。しかし、チェルヌイシェフスキーはこの本が「いかなる関係においてもまったく注目すべきものはない」<sup>32</sup>と切って捨てる。「この本はリベラルな思想に貫かれている」からであり、「ギゾー、ティエール、トクヴィル諸氏などのリベラリズムは我々にとって非常に少ない魅力しか持っていない」からである<sup>33</sup>。著者のギゾーについてもチェルヌイシェフスキーは、「その頑迷さと許しがたい誤謬によって最近 10 年間の…あらゆる災難にフランスを引き込み」、「王朝

28 石川氏も「彼が 58 年段階にはまだ自由主義者との最終的な決裂を志向せず、自由主義者に対する『忠告』を意図していたと解釈できる余地」を認めている。石川、前掲書、66 頁。

29 石川、前掲書、64 頁。

30 *Чернышевский. Борьба партий во Франции при Людовике XVIII и Карле X // Современник. Т. 70. Кн. 2. С. 309-364; Т. 71. Кн. 1. С. 133-184.*

31 Примечания // Чернышевский. Т. 5. С. 928.

32 *Чернышевский. Борьба партий во Франции // Чернышевский. Т. 5. С. 213.*

33 Там же.

を破滅させ」「祖国を内戦に引き込」んだ「フランスでもっとも憎まれている人物の一人」であり、「ルイ・ナポレオンの鉄の独裁の真犯人」である、と手厳しい<sup>34</sup>。「チェルヌイシェフスキーの自由主義批判」としてこの論文が挙げられる理由であろう。

しかしここで彼が批判の俎上に上げているのは復古王政のフランスで「リベラル」と呼ばれていた政治家、思想家だけに限らないという点に注意する必要がある。また、チェルヌイシェフスキーも指摘するように、「リベラル」、あるいは「リベラリズム」という単語自体、時と場所によって大きく異なる内容を示す用語である<sup>35</sup>。「チェルヌイシェフスキーの自由主義批判」に言及する際には、まず、いかなる「自由主義」を彼が批判したのか、「リベラル」と呼ばれる人々のいかなる行動様式が批判の俎上に上がったのか、分析を掘り下げる必要があろう<sup>36</sup>。

たしかにこの論文でチェルヌイシェフスキーが分析の対象の中心に据えるのは、まさに復古王政期のフランスのリベラルである。チェルヌイシェフスキーの批判は、このフランスのリベラルが「リベラリズムの理想」から逸脱した「特殊性」を備えている点にある。ここから「名称と本質の間の不一致によって不要な同盟、根拠のない共感と反感が生まれた」からであった<sup>37</sup>。この時期のフランスの「いわゆるリベラル」とは、「詐欺的な概念」なのだ、と彼は力説する<sup>38</sup>。もともとは「イギリス憲法の信奉者（言葉の正確な意味でのリベラル）」も含んでいたフランスのリベラルではあったが、やがて権力を手にすると「専制が自分たちの利益になることを見て」自由に敵対するようになったのだ<sup>39</sup>。つまり、ここでのチェルヌイシェフスキーの批判は、自由の拡大に向けた平和的改革という政治路線に向けられたものではなく、フランスのリベラルの非合理性、「特殊性」に向けられたものなのである。

しかも「名称と本質の不一致」はリベラルに限らない。ここにフランスの政治的混乱の根本的な原因があった。リベラル、王党派（ユルトラ）、ブルボン派（立憲王政派）、人民の四者がそれぞれ自らの本質を見誤ったために、「想像を絶した説明不能の錯綜」、「錯誤の喜劇」が引き起こされたのであった<sup>40</sup>。リベラルは自由のために戦っていると信じて

34 Там же . С . 214.

35 Там же . С . 215.

36 「リベラル」の多様性については、拙稿「書評：杉浦秀一『ロシア自由主義の政治思想』」、ロシア史研究会『ロシア史研究』、1999年、第65巻、参照。

37 Там же . С . 219.

38 Там же . С . 220.

39 Там же . С . 223.

40 Там же . С . 220.

いたし、王党派は王座のために戦っていると思っていた。「しかし『自由』や『王座』という言葉は少しも実際の志向を表わしていなかったのだ」<sup>41</sup>。「彼らは王座とか自由よりもずっと間近の利益に心を配ったのだった」<sup>42</sup>。

1858年9月号の『現代人』に掲載された第二論文の後半部分では、復古王政期のリベラルとブルボン派との権力闘争が分析されている。チェルヌイシェフスキーの分析では、シャルル10世（ブルボン派）は平民と同盟するのが合理的だった。国王権力にとって政治的に目覚めておらず物質的な要求も控えめな人民との同盟が権力の維持のために最も合理的だった、というのである。「健全な判断力は最も有利な政策として人民との同盟を示した」<sup>43</sup>。人民は憲法や出版の自由には無関心だし彼らの生活の改善にはあまりコストがかからないからだ。ところがブルボン派は人民に何もしなかった。他方、リベラルも人民から一定の支持があったにもかかわらず、人民のためには何もしなかった<sup>44</sup>。人民との同盟を選ばなかったブルボン派には、次に旧貴族や地主を中心としたユルトラと同盟するか、あるいはリベラルと同盟するか、という二者択一が残された<sup>45</sup>。健全な判断は、経済を握っているリベラルとの同盟である。「その点についてはいかなる疑問もあり得ない」<sup>46</sup>。総じていうならブルボン王権はまず人民と同盟すべきであったし、次善の策としてリベラルと同盟すべきであった<sup>47</sup>。しかしそれができず、ユルトラ王党派との同盟を選んだのは、ブルボン派にそれだけの勢力も知力もなかったからである。ブルボン派は人民でも、リベラルでもなく王党派と「反自然的な同盟」を結んだ<sup>48</sup>。これによって人民はブルボン派ともリベラルとも同盟することができず、絶望的な蜂起へと向かい、結局、七月革命によってシャルル10世のブルボン王朝は廃されることとなったのであった。ブルボン王朝の利益、という見地に立てば、ブルボン派は王党派ではなく、人民、少なくともリベラルと同盟するべきだった、というのが理性的な結論であろう。ところがそれができなかった。「希望は若輩者に残しておこう。いばらの木にブドウの房を期待することは大人にはふさわしくない」<sup>49</sup>。

41 Там же . С . 222.

42 Там же . С . 224.

43 Там же . С . 264-265.

44 Там же . С . 275.

45 Там же . С . 269.

46 Там же .

47 Там же . С . 276.

48 Там же . С . 291.

49 Там же . С . 277.

さて、このフランス復古王政期の諸党派の争いを、ロシアのアナロジーととらえるなら、理性的に行動しなかったフランスのリベラルに対する批判は、ロシアのリベラルに対する、理性的に行動せよ、との警告となる。さらにフランスのブルボン派はアレクサンドル2世政府、ユルトラ王党派はロシアの農奴主勢力のアナロジーであるし、もちろん、フランスの人民はロシアの農奴農民に相当する。すると、この時点でのチェルヌイシェフスキーは、アレクサンドル2世政府が農民の利益に配慮してリベラルと同盟して農奴主勢力に対抗することが「健全な判断力」が示す結論である、と主張していることになる。ただし、それと同時に、「いばらの木にブドウの房」のたとえからは、ロシアにおいてもそれができない、という冷めた現実認識を読み取ることもできよう。58年の夏の段階でチェルヌイシェフスキーは、アレクサンドル2世による「上からの改革」の限界を見定めた、と解釈する根拠である。

### Ⅲ 「共同体的所有に対する哲学的偏見の批判」

58年12月の『現代人』に発表された「共同体的所有に対する哲学的偏見の批判」<sup>50</sup>は、チェルヌイシェフスキーの農奴制改革議論の大きな転機を示すものとされてきた。この論文を契機に「チェルヌイシェフスキーの農民問題・農民改革の路線は…改革の道から革命の道に決定的に転換し」<sup>51</sup>、以後チェルヌイシェフスキーは「改革から革命へのあらたな段階に入った」<sup>52</sup>、とされてきた。実際この時期、チェルヌイシェフスキーはアレクサンドル2世による「上からの改革」に絶望し、平和的改革の道を放棄したのだろうか、この論文を素材に検討してみよう。

1857年11月にナジーモフ宛て勅書によって農奴制改革に向けた政府の方針が明らかになると、ロシア国内の言論界では農奴改革に関する議論が沸騰した。チェルヌイシェフスキーもまた、農民の利益を擁護する立場でこの論戦に参加した。その際、彼は、解放後の農民が土地を失ってプロレタリアート化し零落することを防ぐために、共同体的所有を伴った土地付きの解放を訴えたのだった。

ところがこの「共同体的所有に対する哲学的偏見の批判」の最初の部分においてチェルヌイシェフスキーは、共同体を巡る議論において「長いこと沈黙してきた」と語り、「私

50 *Чернышевский. Критика философских предубеждений против общинного владения // Современник. 1958. Т. 72. Кн. 2. С. 575-614.*

51 石川郁男「チェルヌイシェフスキーの経済学」、金子幸彦編『ロシアの思想と文学』、恒文社、1977年、253頁。

52 同上、254頁。

は自分が恥ずかしい]、「私が共同体的所有の問題を提起した時の時期尚早な自信過剰を思い出すのも恥ずかしい」と後悔し、「自分の過去の無分別を悔いている」と告白している<sup>53</sup>。あきらかにチェルヌイシェフスキーの議論に重大な転機が訪れたことが分かる。おりしも57年1月に設立された特別秘密委員会を改組した総委員会において58年12月に農民に分与地を取得させる方針が決定した直後のことである。土地付き解放を訴えてきたチェルヌイシェフスキーがここまで後悔する理由は何か。

その理由を彼は、おそらく政府の方針を直截に批判することができなかつたためであろう、多少回りくどい語り口で説明する。彼によれば、「高度な福祉」（共同体的土地所有）を保障するための「低次の福祉」として「地代が共同体に参加する人のものである」、および「地代を受け取る人が、その地代そのものから派生する債務を負わされていない」という二つの前提条件が必要だ、と説く<sup>54</sup>。「地代рента」という単語を用いているのでわかりにくい表現になっているが、「地代」を「土地からの利益」と解釈するなら、ここでチェルヌイシェフスキーは、土地付き解放にあたっての買戻し金のことを問題にしていると解釈することができる。土地を手にしても、そのために高額な買戻し金を課せられるのなら、農民の生活は一向に改善されないのだ。「一連の自由主義批判論文」においてフランスの政治的諸勢力の誤りを批判してきたチェルヌイシェフスキーではあるが、ここで彼自身もまた、誤っていたことが判明したのだ。チェルヌイシェフスキーが読者に対してひたすら恥じ入り、後悔する理由は、農奴解放議論において彼が買戻し金の問題を見落とすという誤りを犯していたため、と考えるのが妥当だろう。

また彼は、食事の例を用いても「私の恥ずかしさの原因」を読者に説明している。ここで彼は読者に対して「食料品が全くあなたのものでなく、その食料品から作られた食事ごとにお金を、その食事自体に値しないばかりかそもそもあなたが極端な節約なしでは全く支払えないようなお金を取られる、ということを知った時の私の気持ちがあなたには分かりますか」と問いたすのだ<sup>55</sup>。その上で彼は「私が愛する人に害悪しかもたらさないこの食品すべてはなくなった方がいい！あなた方に零落しかもたらさないものはすべてなくなった方がいい！」と叫ぶのだった<sup>56</sup>。「上からの」平和的改革に絶望して革命路線に転換した宣言のようにも見える。

しかし、それに続いて共同体的所有の議論について「この問題はすでに放棄することが

53 *Чернышевский. Критика философских предубеждений // Чернышевский, Т. 5. С. 358.*

54 Там же. С. 360.

55 Там же. С. 361.

56 Там же.

できない」「もしこの問題が放棄できないのなら、しかたない、その審理に参加する必要がある」とも書いている<sup>57</sup>。引き続き共同体的所有に関する議論を続ける、という宣言である。議論を続ける、と宣言している以上、この時点でもチェルヌィシェフスキーは世論によって、政府による改革の道筋に影響を与えようとしていることは明らかである。

チェルヌィシェフスキーは、「上からの改革」に期待したことを恥じた、というよりは解放後も農民に負担を強いる買戻し金の問題を見落として議論をしていたことを恥じている、と解釈すべきであろう。「上からの改革」が本来彼の目指していたものと違った方向に進んでいることを認識しながらも、なお、議論によって改革の道筋に影響を与えようとしているわけである。進行中の農奴改革に続くさらなる改革を展望してもいるのである。

#### IV リンカーンと奴隷解放

チェルヌィシェフスキーのリンカーンに対する態度については、すでに個別のテーマとして別稿で分析しているが<sup>58</sup>、ここでは「上からの改革」という観点からチェルヌィシェフスキーのリンカーン論を分析する。

上述の「共同体的所有に対する哲学的偏見の批判」の直後、1859年1月号からチェルヌィシェフスキーは外国の政治状況を分析するため『現代人』に「政治」欄を開設した。当時アメリカ合衆国における奴隷解放事業は、ロシアの農奴制改革事業とほぼ同時進行的に進んでいたため、この「政治」欄においても彼はアメリカの奴隷解放事業に注目し、詳細に解説している。

さて、この「政治」欄にリンカーンの名が初めて登場するのは1860年11月号のことである。ここではアメリカ大統領選において共和党のリンカーンが当選したことを、まだ十分な情報が届いていないためであろう、手短かに伝えている。しかしそれにもかかわらず、チェルヌィシェフスキーはリンカーンが奴隷解放事業に着手することを確信し、リンカーンが当選した「1860年11月6日」という日を「偉大な日」と呼び、さらにこの日に「合衆国の歴史における新時代の始まり」という画期的な意義を付与するのだった。リンカーンの当選によって「偉大な北アメリカ国民の政治的発達における大変革が開始された」のである<sup>59</sup>。またチェルヌィシェフスキーは、リンカーンの当選が「全人類の生活にとって重要だ」

---

57 Там же .

58 ОЯ О. Отношение Н. Г. Чернышевского к А. Линкольну: в отделе «Политика» в журнале «Современник» // Чернышевский. Статьи, исследования, и материалы. Саратов, 2019. Вып 21 (в печати).

59 Чернышевский. Политика . Т . 8. С . 353.

とも指摘している<sup>60</sup>。言うまでもなくチェルヌイシェフスキーは合衆国における奴隷解放事業とロシアの農奴解放を並行して見、その中におけるリンカーン大統領による「上らの」[大変革]を期待しているのである。

実際、前任のJ. ブキャナン大統領の時代にはチェルヌイシェフスキーは「上から」の改革に期待していない。むしろ「下から」の変革に同情的である。1859年11月号の『現代人』の「政治」欄においてチェルヌイシェフスキーはアメリカのジョン・ブラウン事件を報じている。これは奴隷廃止論者のジョン・ブラウンが黒人奴隷の蜂起に必要な武器を調達するために政府の武器庫を襲撃した事件である。結局襲撃は失敗し、一味の「大部分はその場で殺された」（ブラウンは裁判ののち絞首刑に処せられている）のだが、チェルヌイシェフスキーは「規模においてこの事件は全く重要ではない。しかしこの種のものの始まりとして意義深い」とこの事件を重視し、ブラウン自身についても「合衆国における黒人の事業のための最初の殉教者たちの指導者」と評価している。その上で「最初の試みは、最初の試みがほとんど常にそうであるように、失敗した」が、「奴隷廃止論者は時を経て彼らの最初の殉教者たちの復讐をするだろう」と予言している<sup>61</sup>。ブキャナン政権下における「上からの改革」に期待できないチェルヌイシェフスキーは、ブラウンが説く黒人奴隷の武装蜂起に活路を見ていたのである。奴隷解放の「革命的路線」である。

つづく11月号でチェルヌイシェフスキーはジョン・ブラウンの伝記を詳しく伝え、さらに「政治」欄の付録として彼による綱領的文書「合衆国国民のための臨時憲法および諸規則」を掲載している<sup>62</sup>。これによってチェルヌイシェフスキーは読者に「極端な解放論者の党派の創設者」としてのジョン・ブラウンを、そして彼が合衆国における奴隷制を「一部の市民の他の部分に対する」「最も野蛮な戦争」とみなして「軍団」を組織したことを知らせたのであった<sup>63</sup>。黒人奴隷の武装蜂起による合衆国における奴隷の「下からの」解放に寄せるこの時期のチェルヌイシェフスキーの共感は明らかである。

しかし、すでに述べたようにリンカーンの大統領選勝利とともにチェルヌイシェフスキーにおいて「下からの」奴隷解放論は急速に後景に退く。リンカーンの勝利を伝えた11月号に続く12月号でチェルヌイシェフスキーはリンカーンの共和党を「奴隷制廃止を志向する政党」と期待をもって迎え、現職大統領ブキャナンの「極端に農場主的な政党」

60 Там же .

61 Чернышевский. Политика . Т. 6. С. 453-454.

62 Временная конституция и постановления для народа Соединенных Штатов // Современник . 1859. Т. 78. Кн. 1. Отдел « Политика ». С. 158-160.

63 Там же . С. 158.

との違いを際立たせている<sup>64</sup>。

ところが実際に内戦が現実味を帯びるにつれて彼は、一時的にリンカーンによる戦争のイニシアチブに懐疑的な立場を示す。彼はアメリカにおける大統領の権限が英国やベルギーの首相より限られていること、議会で共和党が多数を占めていないことなどを指摘して<sup>65</sup>、「リンカーン政権は、たとえ望んだとしても、奴隷制に対して何ら対策を実行できないだろう」と結論付けている<sup>66</sup>。むしろチェルヌイシェフスキーは共和党穏健派に属するリンカーンが南部と妥協して現状の南部の奴隷制を容認することを恐れる。彼にとって「妥協はあらゆることよりはるかに悪い」のであった<sup>67</sup>。

しかし実際には、事態は急速に展開し、リンカーンの大統領就任直後に南軍がチャールストン湾のサムター砦を攻撃した<sup>68</sup>。事実上の内戦開始である。すでにテロによる解放も現実的ではない。残された選択肢は、ワシントン政府が南部と妥協せずに戦争を遂行し、合衆国という枠組みで奴隷制度を廃止することのみであった。したがってチェルヌイシェフスキーにとって様々な方面から提出された妥協案を否定した、新しい大統領による宣戦布告は大きな意味を持っていた。

このように、リンカーンによる「国民武装」への呼びかけはチェルヌイシェフスキーのリンカーンに対する期待を復活させた<sup>69</sup>。しかし同時にチェルヌイシェフスキーが目にするのは「大統領の呼びかけに対する国民の反応」である<sup>70</sup>。議会は臨時予算を満場一致で可決し、ニューヨークの銀行家たちは財政支援を申し出る。「至る所で義勇軍」が集まり、熱狂的な集会が開かれる。「至る所で国民は熱狂によってこの呼びかけに答えている」。このような「国を守るための偉大な国民の運動」<sup>71</sup>をまえにして、戦況についても、奴隷解放についてもチェルヌイシェフスキーは楽観視している。奴隷廃止を求める「国民の声」は「議

64 *Чернышевский. Политика // Чернышевский. Т. 8. С. 382-383.*

65 *Там же. С. 393.*

66 *Там же. С. 395.*

67 *Там же. С. 407.*

68 1月号の『現代人』は1860年12月29日に検閲を通過している。他方、リンカーンの大統領就任は61年3月4日、南軍によるサムター砦攻撃開始は61年4月12日である。おそらく、検閲を通過した後、4月まで発行が遅れていた1月号にチェルヌイシェフスキーは検閲を経ずにこのニュースを差し込んだものと思われる。

69 *Чернышевский. Политика // Чернышевский. Т. 8. С. 497.*

70 *Там же. С. 498.*

71 *Там же. С. 500.*

会に浸透しており」、議会は「非常に穏健な」大統領に奴隷解放を迫るからである<sup>72</sup>。すでにチェルヌイシェフスキーはリンカーン大統領のイニシアチブというよりは、大統領を突き動かす議会に、そして議会を支配する世論の力に期待を寄せているのである。その意味でチェルヌイシェフスキーにとって「大衆の間で廃止論者の意見が力を持ってきた」ことは重要な意味を持っていた<sup>73</sup>。

1862年に入っても北軍が有利に戦闘を進め、春にテネシー州で鉄道の要衝を占拠すると、チェルヌイシェフスキーは「この成功が相当戦争の終結を早めることは非常にありそうなことである」<sup>74</sup>、と戦争の終結とそれによる奴隷制度の廃止を確信するのであった。しかしこれ以降のチェルヌイシェフスキーの思想をたどることはできない。『現代人』は6月に停刊を命じられ、7月にはチェルヌイシェフスキー自身も逮捕されてしまうからである。

たしかに民主党のブキャナン政権においてチェルヌイシェフスキーは、ジョン・ブラウンのようなテロリズムしか奴隷解放の道筋を見出せなかった。しかし、リンカーンの当選後、彼はリンカーンのイニシアチブによる奴隷解放という道筋を見出す。やがて一時的にリンカーンの個人的イニシアチブに失望した後も、彼は合衆国の大統領制という政治メカニズムに対しては期待を失わない。奴隷解放を求める世論が議会を動かし、議会が大統領の行動を制限するからである。

## V 英国自由党とイギリスの選挙改革

前節のリンカーンに関する論説と時期的に前後するが、ここでは1859年1月号から『現代人』誌にもうけられた「政治」欄におけるチェルヌイシェフスキーによる評論のうちで、英国自由党に関するものを分析する。

1850年代後半の英国議会の勢力図は、当初は、産業革命以前の社会を基盤とする保守的なトーリー党と、資本主義的改革を進めるウィッグ党との対立が基本であった。ところがやがてウィッグ党内でも1832年の選挙改革を主導したラッセル派と保守的なパーマストン派とが対立し、さらには議院内急進派やピール派などのグループが形成され、政局は流動化していた。一般的に英国自由党の成立は、第二次パーマストン内閣の成立した1859年6月をもってするのが通例だが、実際はこのような政治状況の中で、それ以前からリベラル・グループの結集が進み、「自由党」を名乗っていたらしい。ここで分析の対象とするチェルヌイシェフスキーの「政治」欄においても、「自由党」がすでに1859年1

72 Там же . С . 555.

73 Там же . С . 629.

74 Там же . С . 646.

月に成立したことになっているのは、このような事情によるものと思われる。

さて、1859年1月号の『現代人』誌で掲載が始まった「政治」欄であるが、ここでチェルヌィシェフスキーは過去10年のヨーロッパの政治情勢を概観して、ドイツ、イタリア、スペインを「非常にありがたくない」、フランスと英国は「ほかの諸国民に比べてより成功している」と評している<sup>75</sup>。なかでも英国の政治においてチェルヌィシェフスキーが注目するのは、「自由党」である。彼は貴族的な英国議会の中で非貴族的な勢力として、特にウィッグ党のブライトに注目し、ブライトを中心として形成された「独立自由党」、およびブライト自身の政治活動を読者に紹介する<sup>76</sup>。当時ブライトはアジテーションや集会で頭角を現し、クリミア戦争の前には反戦と福祉の充実を説いたのだったが、好戦的な英国民の世論の支持を得られず落選中の身の上だった。このようなブライトについてチェルヌィシェフスキーは「真実を語るという自らの使命に忠実だった」と好意的だ<sup>77</sup>。また、「独立自由党」に対しても、選挙改革に関するその綱領「すべての独立自由主義者の綱領」を転載して<sup>78</sup>、この党に対する共感を露わにしている。

つづく2月号の「政治」欄においても、チェルヌィシェフスキーは選挙改革に向けたブライトの活動を伝えている。「彼はそのパーミンガムの集会で、改革事業に生き生きとした動きを与えた。そして去年末までにイギリスとスコットランドの大都市において、パーミンガムの集会のあと、いくつかの巨大な集会が続いた」<sup>79</sup>。そのうえでチェルヌィシェフスキーはブレットフォールの集会におけるブライトの演説を「非常に重要」と位置づけ、選挙制限の引き下げ、無記名投票の導入と公正な区割りなどを骨子とする彼の改革案を「全く正しい」として『現代人』誌に転載している<sup>80</sup>。ブライトに対するチェルヌィシェフスキーの共感は、1月28日のロッチデールにおけるブライトの演説を『現代人』の誌面にして7ページにわたって紹介していることから明らかである<sup>81</sup>。その上でチェルヌィシェフスキーは、「アジテーションは日ごとに増大している」、「来年まで改革を延期すれば古い政党内閣は改革派により大きな譲歩をすることになる」とブライトを応援するのだった。

3月号の「政治」欄においても引き続きチェルヌィシェフスキーは英国の議会改革に関

75 Чернышевский. Политика // Чернышевский. Т. 6. С. 5.

76 Там же. С. 32.

77 Там же. С. 36.

78 Там же. С. 44.

79 Там же. С. 82-83.

80 Там же. С. 88.

81 Современник. 1859. Т. 73. Кн. 2. С. 337-343; Чернышевский. Т. 6. С. 94-99.

する話題を続ける。ここで彼は保守党のダービー内閣が選挙法改革案によって総辞職に追い込まれる可能性に言及し<sup>82</sup>、次期内閣及び議会の勢力分布について予想する。また、3月号にも政府側からの選挙法改革案に対する下院におけるラッセル、ロバック、ブライトの反対演説を Times 紙から転載して読者に紹介している。

結局、『現代人』の読者は、59年6月号の「政治」欄において政府案が否決されたために議会が解散されたことを知るのだが、それ以後チェルヌイシェフスキーは、「イタリアの戦争のため」、「非常に長い間、英国の内政については語らなかった」<sup>83</sup>。「資本と労働の間の戦い」についても「次号の『現代人』個別の論文として扱う」としながらも実現しなかったし、「戦争によって二義的な意義に押しやられた改革主義運動は、今復活しており、おそらく次号で我々はそれについて語ることになるだろう」という予告も実行されなかった。これはおそらく、ロシア国内の検閲が再び強化されたことが原因であろう。

## むすび

ここまで本論において、チェルヌイシェフスキーが「上からの改革」に絶望し、リベラルを批判し、平和的改革の道から革命的改革の道へと方針転換した、とされる時期の彼の論文を検討してきた。すでに見てきたとおり、「カヴェニャック」は、二月革命を主導しながらその後、「国家人」としての資質を欠くカヴェニャックが労働者との同盟を反故にしたために六月事件を招き、また自らも支持を失ってナポレオンの第二帝政に道を開くに至る一連の政治過程を評論したものだ。この論文においてチェルヌイシェフスキーは、カヴェニャックらのリベラルが誤りを犯したと指摘する一方、労働者の側もリベラルと安易に同盟し、裏切られたとみるや無計画に蜂起するという誤りを犯したと指摘した。フランスの事件をアナロジーとしてロシアの現実を顧みるのなら、ここでチェルヌイシェフスキーは農民に対してはリベラルと安易な妥協をするな、と警告しているようにも見える。しかし、『現代人』誌の読者は首都の識字層である。むしろ、この論文はリベラルに対して、フランスのリベラルが労働者と袂を分かったが故に自滅した事例を示すことによって、ロシアの農民の利益を尊重するよう訴えたものと考えられよう。

「ルイ 18 世およびシャルル 10 世治世下のフランスにおける諸党派の争い」においても、チェルヌイシェフスキーの批判の矛先が向けられたのは、「その頑迷さと許しがたい誤謬によって」「あらゆる災難にフランスを引き込んだ、リベラルのギゾーのみではなかつ

82 Чернышевский. Политика // Чернышевский. Т. 6. С. 130.

83 Там же. 405.

た。そのみならず、政治的判断を誤り人民とではなくリベラルと同盟した結果、王朝を滅亡させたシャルル 10 世、さらには、王党派や人民、つまりは自らの本質を見失い、「健全な判断力」に従わずに「不自然な同盟」に走ったすべての政治アクターに向けられていたと解釈することができよう。ロシアの現実に引き写せば、これをアレクサンドル 2 世政府に対して、理性の示すところに従って、農奴地主勢力の抵抗を廃して人民の利益を尊重しつつリベラルと共同して改革を遂行せよ、とのチェルヌイシェフスキーの訴えである。

このように自らの本質的利益を見失い、理性的な政治判断ができなかったフランスの諸党派を批判したチェルヌイシェフスキーであったが、彼もまた、誤りを犯していた。「共同体的所有に対する哲学的偏見の批判」においては、彼もまた理性的な判断ができなかったことを「後悔」し、読者に懺悔している。ここでの誤りの本質は、「上からの改革」を信じた、というよりは買戻し金の問題を見落としていた、という点にあると解釈すべきであろう。「政治」欄におけるリンカーン評価に見られるように、合理的な判断に基づきさえすれば上からのイニシアチブは強力な改革の推進力となるのだ。農奴解放令の後にも関わらず、チェルヌイシェフスキーは依然として世論の圧力による、さらなる「上からの改革」の可能性を見ていると解釈できよう。

フランス、そしてロシアにおけるリベラルが本質を見失っているのに対し、「言葉の正確な意味でのリベラル」としてチェルヌイシェフスキーが高く評するのが英国の自由党であった。世論の圧力を背景に、平和的手段によって改革を進めるからである。したがって、チェルヌイシェフスキーによるフランスやロシアのリベラルに対する批判は、平和的な改革という政治路線にあるのではない。彼らが自らの本質を忘れ、自らの真の利益を見誤ったことにある。チェルヌイシェフスキーの「自由主義批判」とは、いわば彼による「偽リベラル批判」なのである。シャルル 10 世の「上からの改革」批判も、「上から」の改革のイニシアチブを否定したというよりは、人民とではなく王党派と同盟したシャルル 10 世の非理性的行動を批判したものだ。フランスやロシアのリベラルを批判し、アレクサンドル 2 世による解放が買戻し金という欠陥を抱えていることを批判したとしても、英国自由党が示すような平和的な改革の道やリンカーンに見られるような「上から」の改革のイニシアチブを評価している以上、これをもってチェルヌイシェフスキーが「革命的変革への道へ転換した」と言い切ることができるか、平和的な改革を志向する 19 世紀の西欧リベラリズムの理念と、愚行を繰り返す実際のリベラルとを切り分けたうえで、検討を進めるべきである。

(平成 30 年度札幌大学研究助成制度による研究成果である)